

昔むかし、あるところに、男とおかみさんがおりましたが、子どもがあんまりたくさんいて、みんなに食べさせることができなかったで、下の三人の女の子を森に捨てました。三人は、どんどん歩いていきましたが、家いっけん見つかりません。

「かしこいモリー」『おはなしのろうそく』東京子ども図書館

親に捨てられて旅に出ます。「ヘンゼルとグレーテル」も同じ理由で家から出されます。

昔むかし、まずしい生まれの三人兄弟があつた。兄弟のまずしさは、ますますひどくなり、もう食べるものも、飲むものもなくなってしまった。そこで兄弟は、

「このままではだめだ。広い世間へ出て行って、幸運をさがそう」と話しあい、広い世間へ出ていった。

「はいのうと、ぼうしと、角笛」『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監修／小峰書店

貧しさから、幸運をさがしにみずから旅に出ます。

むかし、あるところに、ひとりの若者が、目の見えない母親と暮らしていました。
・・・

息子はなんとかして母親の目が見えるようにしてやりたいと思って、いっしょうけんめい神仏にいのつていました。すると、ある夜、

「山に仙人世界というのがある。そこへ行つて、仙人におねがいしてみよ」という夢のおつげがありました。

・・・

息子は、

「海に竜宮世界があるんだから、山に仙人世界があつてもふしぎではない。とにかく行つてきます」と母親にいい、麦をいってひき臼でひき、麦こがしをどっさりこしらえました。そして、それを袋に入れてせおい、仙人世界を探しにでかけました。

「仙人の教え」『日本の昔話5』小澤俊夫再話／福音館書店

母親の目を治すために旅に出ます。母親の目を治すというのは、昔話を構造で考えると「課題」です。

むかし、あるところに、たいそうな金持ちがありました。この家には息子がひとりいましたが、それが、金をもちだしては遊んでばかりいて、すこしも働こうとしませんでした。

ある日のこと、父親は、ついにたまりかねて、息子をよびつけ、

「おまえみたいなものを、このままおいといたら、この家はたちまちつぶれてしまう。どこへでもでていくがいい」と、きつくいわたししました。

息子は、しかたがないので、あてもなく家をでていきました。

「わらしべ長者」『日本の昔話1』小澤俊夫再話／福音館書店

遊び人の息子が父親に追い出されます。このモチーフは、「語りの森」の日本の昔話「弓の名人」の冒頭で出てきます。

(王さまは)

「ところでどうだろう、この子に城のきさきにあてた、わしの手紙を持たせてやるわけにはいくまいか。そうしてもらえると、わしはたいへん助かるのだ。お礼には、金貨を二枚やるがな」といいました。

・・・

若者はこの手紙を持って出かけました。

「三本の金髪をもった悪魔」『語るためのグリム童話2』小澤俊夫監修／小峰書店

若者は王の策略に、それとも知らずに乗せられて旅に出ます。

ほかに、父王の命を救うには命の水が必要だと知って、三人の息子たちが命の水をさがしにでかける「命の水」、毎夜金のリングを食べにくる黄金の鳥をつかまえるために、三人の息子たちが探しに出かける「黄金の鳥」、などなど。